

県内の閉鎖水域の浄化を目指して

— 4 閉鎖水域交流会議開催される —



環境悪化が進む河北潟（堆積するゴミ）

昨年11月11日と12日に県内の4つの閉鎖水域（河北潟、木場潟、柴山潟、七尾南湾）の流域で水質浄化に取り組んでいる団体が参加して、交流会議が開催されました。これは河北潟湖沼研究所が、県内の主な閉鎖水域の流域で水質浄化に取り組んでいる諸団体に呼びかけ実現したもので、七尾湾沿岸全住民会議（当日は都合により欠席）、小松市のくらしと緑を守る会、柴山潟環境保全対策協議会と河北潟湖沼研究所が参加しました。最初に今回の交流会の主旨と開催の経過について、大舘小夜子河北潟湖沼研究所代表より、「石川県の湖沼は国内のワースト10にすべて入ってしまうほど汚いが、県内の4閉鎖水域が今年生活排水指定区域になり、対策をとっていくことになった。そこで、それぞれの地域の悩みや取り組みを交流しあおうということで

呼びかけたところ、4つの地域すべてから参加いただけることとなり、この会を開くことができた」という説明がおこなわれました。次に、各団体の代表者により各流域での取り組みの内容が紹介されました。その後の意見交換では、県内の閉鎖水域の水質浄化のために各団体が協力して取り組める内容について、話し合いがもたれました。2日目は河北潟自然保護学校が開校され、各団体の代表も参加して、活発に意見交流がおこなわれました。最後に、近い将来に全国の潟の流域の代表者を集めて「日本海潟サミット（仮称）」を開催することを確認し、2日間の日程を終了しました。

今回の通信は閉鎖水域交流会の特集として、各団体の代表者による発言の概要を掲載します。

4 閉鎖水域交流会議特集

柴山潟水域の取り組み

片山津温泉観光協会副会長・柴山潟環境保全
対策協議会片山津支部会長 松下 奏

柴山潟は小松市と加賀市にまたがる潟であるが、日に七色、色を変えることから「彩湖」と呼ばれていた。片山津温泉のメインであったが、昭和 20 年代ごろから環境が急変してきた。特に昭和 27 年から行われた干拓事業により湖の約 3 分の 2 が埋め立てられた。現在の大きさは、湖水面積が 1.77Km²、湖岸線が 6.3Km であり、全地域が鳥獣の保護区になっている。標高 2 m で流れが悪い、平均水深 2.2 m、透明度は 65.7cm しかなく、曇った日は湖が墨を流したような感じを受ける。潟に流入するいくつかの小さな川に産業排水、生活排水、農業排水などの汚濁物質が流れ込んでいるため、COD が 6 から 7 となっている。流出河川にも問題がある。日本海が近いため、潮止め堰があり塩害を防いでいる。水門があっても開けられない日が多く、そのため、閉鎖水域となっている。

昭和 44 年頃干拓が終了したところから汚染がひどくなってきた。私が子どもの頃は水草が多く、ボート遊びをしてオールに水草が絡まって、助けを呼んだことがあった。魚もいっぱいいたが、最近はいなくなった。潟の風物である四手網漁法も見かけなくなった。高度経済成長の中で、旅館が増えてきて、排水が垂れ流しになってきた。農薬も強いものが使われるようになって、魚の死亡や奇形が見られるようになった。ガンやカイツブリも減少する状況が生まれた。昭和 51 年にソウギョ、ハクレンを 5000 匹放流したが、それも死んで浮かんでいる状況が見られた。何とかしなければいけないということで、昭和 50 年から、商工会の若い人たちの集まりである、あすなろ会が、掃除を行うようになった。また、町民や中学生も潟の清掃に参加し、現在も継続している。また、漁業組合も独自で掃除を行っている。また、シンポジウムを何度か開いたが、一時的な取り組みだけでなく、地道に少しずつ広げていく努力が必要である。幸い行政も 45 年に下水道整備をはじめ、片山津柴山潟の沿岸地域では供用が開始され、上

流域もだんだん整備が行われてきた。上流域の汚濁負荷がなくなれば、柴山潟も良くなるだろう。

最近では、状態が少しずつ良くなって海老やコイ、ウナギなどもとれるようになった。

58 年にヒシ、ヒツジグサ、ジュンサイ、セキシウモが突然なくなった。そのかわりにコケムシがとつぜん増えた。このころ酸性雨が増えたが、これもひとつの原因であろう。さらにソウギョが増えたことがもうひとつの原因となっていることが考えられる。

今後の展望としては、農林省で国営総合防災事業として加賀三湖リフレッシュ事業に、150 億円を投じて、平成 15 年完成を目指している。これは堤防などのハードの整備であり、水質の方はおこなわれない。そこで我々が地道におこなっていかうと考えている。8 年中に柴山潟の中央に 70 m 噴水を作る。これは観光協会と県、市によるマイタウンオアシス整備というもので少しでも水を動かそうとしている。そのほかイベントなどを行っている。

私たちの悩みは、問題は行政が一つでないことである。これは他の地域にも共通する。生活排水に気をつける、油を使わない、フィルターをつける、下水道への加入を進めたり、チラシを配って啓蒙活動をする、アンケートをする等悩みながらなんとかしなければならぬということをやっている。今日は他の地区の活動も勉強させてもらいたい。

木場潟水域の取り組み

くらしと緑を守る会 田中孝子

小松市では木場潟対策室というのがあり、木場潟流域の町内会とかボランティアの人達がいろいろな活動をしている。私は流域には住んでいないが、生協の組合員が自主的に作った「くらしと緑を守る会」の活動があり、環境のことを考えながら、自分たちができるくらし方をしようと 6 年ほど前から取り組んでいる。その一つとして、木場潟がその当時ワースト 2 ということで木場潟のことも考えようということで活動してきている。私たちがやっていることは生活雑排水に気をつけていこうということで、水切りネットを使おう

とか、米のとぎ汁を捨てないなどのいろいろなことをやっている。

特に問題の大きい廃食油に取り組んでいるが、最初は廃食油を持ち寄って固形石鹸をつくっていた。滋賀県の実境生協の専務から、「これでは石鹸ではない、熱を加えないと石鹸にはならない、また固形石鹸では用途が限られて広く使われない」ということを聞き、粉石鹸にしようということで、市役所に申し入れをして、一昨年7月に市に150万円で、粉石鹸のミニプラントを買ってもらった。それを小松市民生協に委託してもらって、現在は粉石鹸を作っている。粉石鹸は「キララ」という台所用洗剤としてアルプラザで売っている。総菜屋や寿司屋から電話があり廃油を使ってくれという相談があり、話を聞くといままでは海に捨てたり、下水に流したりということで、それらの廃油を利用したいと考えた。しかし、これは産業廃棄物であり、それを使っては罪になるということで、今は何とか回収のシステムを作ろうということをしている。

もう一つの問題として、水洗トイレの浄化槽が川を汚していることがある。家庭の浄化槽を測定したらBOD 40-190くらいあった。一方、木場潟に排水を流している企業の下水を調査したところ、良い浄化槽がついていて割ときれいな水を流していた。そこで市に合併浄化槽の助成を依頼した。今年は40機を助成してもらった。今後は廃食油をディーゼル燃料にする機械を導入したいと考えている。

河北潟の変遷

内灘町勤労者協議会 清水武彦

河北潟の昔の話しをしたい。私は生まれ育ちは金沢であったが、たまたま内灘の大根布小学校に勤めたのが河北潟との関わりのはまりである。戦後間もない頃は、あなぼこだらけの県道に沿って砂丘が続いていた。その松林のなかを歩いていると河北潟の向こうに宝達山、医王山等の山なみがみえ、とても気持ちの良い風景であった。大根布小学校は、小高い丘の上であって、河北潟を見ながら授業をしていた。河北潟の水の色は毎日変わる。天気によっても、一日のうちでも変わる、夕映えや、朝日の中でもいろいろな色になる。こども達も河北潟でよく遊んだ。河北潟で泳

いで泳ぎを覚えた。今と違って部落のすぐ後ろまでが河北潟だった。「イタニ」といわれる舟を入れる舟小屋が並んでいた。男の子は5、6年生になると潟漁につれて行かれた。フナ、コイ、ワカサギ、ウナギ、シラサギ、ゴリ、アメゴリ等々、そのころたくさん魚が獲れ、浜の地曳網とともに大切な家庭の収入源であった。

また、こどもと一緒に河北潟に行くと魚釣りや船遊びをし、ろを押すことも覚えた。

河北潟の汚れが気になるようになったのは昭和30年代の中頃であった。おもしろい思い出は、児童会で「河北潟の汚れがひどくなったので、泳がないようにしよう」という取り決めをした。夏休みが終わってこどもたちに聞いたら、河北潟で泳がなかった児童は男では児童会長一人だけで、副会長以下全員が泳いでいた。そこでプールを作ろうということになった。そのころから河北潟は急激に汚れがひどくなった。

昨年「河北潟を診る会」で潟に出てみたら、河北潟は大変汚なくなってしまったことを改めて知った。昔のいきいきした河北潟はなくなった。ヘドロと汚水のたまり場になって、完全に死んだと思った。そしてなんとかしていきいきした河北潟に戻さなければならぬと考えた。

河北潟湖沼研究所の取り組み

河北潟湖沼研究所事務局 高橋 久

清水先生の話のように河北潟は現在汚れている。私たちは河北潟を何とか昔のようにきれいにしていきたいと考えて、河北潟湖沼研究所という組織を作ろうとしている。環境浄化に取り組むときにいろいろな方法があるが、私たちが特に研究所という形をとるのは、環境浄化の方法がまだ完全には解明されていない、河北潟でもまだどのようにして取り組んでいたらいいのかということがはっきりしていないと考えているからである。そして、研究所は、環境を良くしていくための方法を確認し、環境浄化に貢献していくための組織にしていこうと考えている。そこで、湖沼研究所では研究をおこなって環境浄化の方法を確認していかなければならないが、まだ発足してから1年あまりで、まだ、事務局しかできていない。また、自主的に参加する研究委員

会という形しかできていない状況である。現在の湖沼研究所の取り組みは研究所を作るというための取り組みをおこなっている段階で、実際の環境浄化の取り組みということは十分にはできていない。

発足の経過は、清水先生が会長をやっている「河北潟を考える会」が、住民運動の団体としてあり、その有志が研究所の計画をしたところ、いろいろな人達の賛同を得た。大学の研究者、企業の代表者、住民の代表者など20数名により、昨年10月14日に河北潟湖沼研究所の発足式を行った。これは将来的な湖沼研究所の法人化を目的とした発足会で、ここで正式に発足した。設立の主旨は趣意書に示されている。大まかに言うと、現在抱えている環境問題は非常に複雑で、汚濁の現象も複雑で、汚濁の要因、その対処に取り組むべき行政の管轄も複雑である。その問題を解決する上ではいろいろな角度からの調査研究を進める必要があるということで、そういう点から私たちは研究所を企画した。理念としては、その主体となるのは住民、研究者、行政、企業であり、その連携により問題が解決できるとしている。まだ実際には準備段階で、現段階では、組織を作り発展させるための活動を主におこなっている。

研究の方も取り組んでいるが、組織図にあるように、研究を行う場として、基本課題研究委員会があり、現在2つの課題を決め取り組んでいる。1つは現状の把握である。昭和30年代河北潟で泳がないように決め、このころから河北潟が見放され、河北潟に近づかないようになって、その後の河北潟については良く分かっていないため、この課題に取り組んでいる。2つめは河北潟および周辺環境の保全と地域振興に関する研究である。このような基本課題に基づいて、いくつかの小委員会を作っている。たとえば、水質浄化委員会、ここでは、河北潟の水質浄化に有効な技術に関する研究、特にナチュラルシステムという植物を用いた浄化法に取り組んでいる。また、歴史委員会では、河北潟地方に伝わる伝承や神社などの歴史を研究している。その他、開発と環境委員会など全部で6つの委員会が、それぞれのテーマを決め、まだ十分とはいえないが、研究活動に取り組んでいる。

河北潟湖沼研究所からのお知らせ

●新年度友の会会費納入のお願い

河北潟湖沼研究所の新会計年度は4月1日からとなります。会員の皆様は同封の振込用紙にて96年度会費を納入していただけるようお願いします。会費納入が確認され次第、新年度の会員証をお送りします。なお、3月刊行予定の機関誌「湖沼と環境」は現在編集作業中です。出版が遅れてご迷惑をおかけしていますが、もうしばらくお待ち下さい。

●平成8年度河北潟自然保護学校について 新年度は計7講座を準備中です。

- | | | |
|-----|-------|--------------|
| 第1回 | 4/27 | 「環境と倫理」 |
| 第2回 | 5/12 | 野外実習「河北潟の生物」 |
| 第3回 | 6/8 | 招待講師による特別講演会 |
| 第4回 | 8/24 | 「仮：自然保護の行政」 |
| 第5回 | 9/21 | 「仮：環境と開発」 |
| 第6回 | 10/19 | 「仮：河北潟の自然」 |
| 第7回 | 11/10 | 「仮：自然保護の活動」 |

そのほか、12/23には友の会会員と自然保護学校受講生を対象にした忘年会を予定しています。

詳しい内容については、別に「平成8年度河北潟自然保護学校要項」を発行します。

編集後記

今回の交流会議の特集は、各発言者のご承諾を得て、発言の録音テープを編集部が文章に直したものに、各発言者により加筆いただいたものです。また、最終的なグラのチェックは編集部でおこないましたので、誤字脱字等の責任は編集部にあります。

遅れましたが当初予定の4号まで出すことができました。新年度も充実した紙面作りを目指していききたいと思います。(T)

河北潟湖沼研究所通信	VOL. 1 NO. 4
1996年2月15日発行	
発行所	河北潟湖沼研究所
	920-02石川県河北郡内灘町字大清台
	302
	TEL/FAX 0762-86-0433